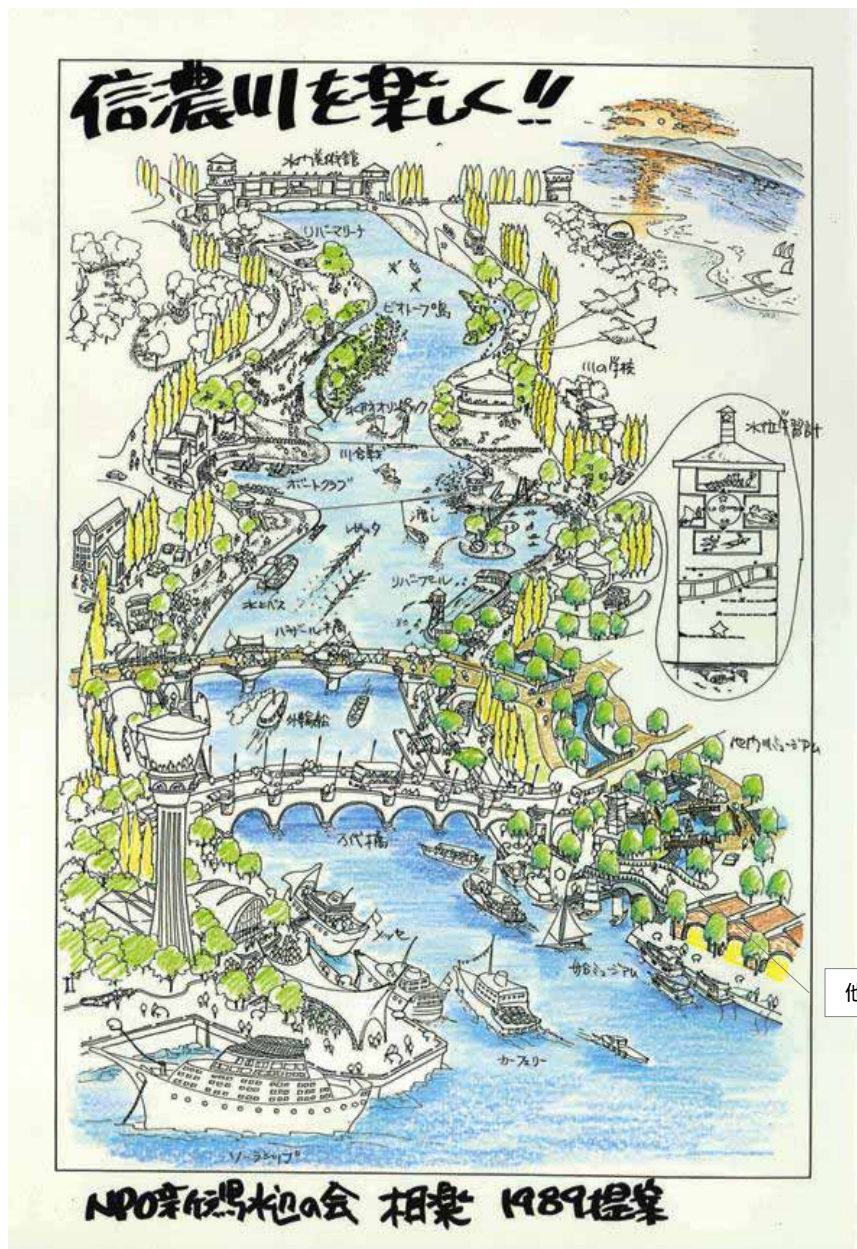


他門川のチョンゲチョンプロジェクト

(株)グリーンシグマ・NPO 新潟水辺の会
相楽 治（建設部門）

下の絵は 1990 年に信濃川に対して夢を描いたマップです。川が治水、利水で縛られていた中で環境や本来の川の魅力を引き出そうとデフォルメしたマンガ信濃川下流です。面白いものですが、このいくつかは現実の姿になっています。万代島トキメッセ、リバーマリーナ、港の博物館などです。これも信濃川水門があるから将来は可能になるだろうと思ったからです。こう考えられたのも、大学時代に昭和橋上流右岸に艇庫のある新大ポート部に身をおき、エイトなど舟の上から岸辺を眺めていたので想像できたためだろうと思います。



このマップにも他門川の再生がイメージされています。川に向けた都市の新しい施設もいいが、やはり新潟らしい堀をほうふつさせる他門川は、堀割がめぐっていた左岸古町側に近く堀割とつながっていたこともあって、歴史的な顔や匂いを持っていました。同じ頃、水辺の会の会員で建築家の上山寛氏が次のような図で他門川再生構想の提案をしていました。それは川の景観復元ではなく、まさしく川に向けた都市の再開発としての「他門川再生」でした。そこには川の持つオープンスペースとしての魅力、すなわち水の装置的な属性の魅力を引き出し、都市を居住、商業、文化、交流の場として蘇生させた力強さがありました。（水都の再開発提案図参照）

この提案後に何度か街なかの堀を再生する話がありました。だが、出ては消え、消えては出てくるという状況でした。「地元が望まないものはどうしてもねえ」と思っていると 2001 年春に堀川さんという名前そのものが堀再生と一体になりそうな人が「堀再生を考えたいの

で相談に乗って欲しい」と私に声を掛けてきました。その辺から寿司屋の K さん、商店の M さん、下町の M 夫妻、市の T さんなど、熱心な堀再生想いの人たちによる運動が始まったと言えます。堀が多くの反対も無く埋められていったのは国体開催時にドブ川状態だったからだけではなく、堀と道路、堀と家々との関係が希薄だったからです。使わない堀には市民の関わりも薄く、埋められる必然性があったわけです。



水辺が道路と同価値以上になる都市が水都だ

いま他門川を再生するというと多くの人々が下の写真のような時代のドブ川に戻すなんてとんでもない、と反対します。ソウル市の清溪川も同じように、くさいドブ川の消去、スラムの撤去、土地の確保という利用で埋められていました。確かにそこには堀や川に背を向けた暮らしがあり、水辺は川に張り出す住宅などの排水場所になるという悲惨な存在でした。そのままでは車社会の動脈である道路用地の確保もできないという問題がありました。しかしだからといって全部埋める必要はあったのか。「少くも川の人格を残してくれても良かったんじゃないのか」と川は嘆いているように思えます。



堀再生の動機は、都市の景観や情緒再生だけか
現在、都市の川や堀の自然・文化資源を守る「運動」とそれを改

善し魅力を引き出し「事業化」をしている事例は、柳川堀割、松江堀川、広島太田川、徳島新町川、京都加茂川、近江八幡八丁堀、七尾御祓川、東京隅田川、北上展勝地、小樽運河、そして新潟など各地にあります。でもゼロから再生させるといったら下のような新潟市歴史博物館や美術館前の公園での修景物になるのがせいぜいです。使われなくなった堀や川は、都市の中の歴史的な点景記念物や休息の場として形態のみ復元されるので、街や暮らしの関係存在での復元再生ではありません。都市の中で堀や川の復元が、どんな関係を再生させるのか、創り出すのが最も重要な論点です。でも、どこから始めるか、どんな形態で再生させるかのみの（市民に判りやすいか）論点になることがしばしばです。情緒や都市景観物としての堀や川は大事ですが、一度失ったものをゼロから再生させるには少なくともその意義だけではパワーになりません。

個人的な想い、地域のニーズや夢、下町再生、水都の顔づくり、都市の文化遺産の復元、都市的土地利用、中心市街地の活性化、都市交通の転換、自然再生、都市防災、都市居住を転換するエリアマネジメント、コンパクトシティ戦略など再生の意味や効果を再考し、市民の総意に練り上げる『他門川再生論』の構築が不可欠です。

そう考えると、上山寛氏が“都市再生としての他門川の再生”を描いたのは時代の先取りだったと言えます。



幸運にも、2004～2006年の3年間でNPO全国水環境交流会の受託した内閣府の「自然共生型流域社会づくりの市民研究」を石狩川流域、筑後川流域、信濃川下流域他門川の3ヶ所で始めることになりました。それで上山寛氏の「他門川

の再生都市論」の再構築が、川の再生研究として始まったわけです。そこで当初2001年頃の堀割再生研究活動でできなかったものを、官民個人が自由な立場で議論しあうことで少しは本質に迫れるのではないかと思ったのです。その議論のベースは、その前年度から始めていた「萬代橋景観フォーラム」にもありました。萬代橋フォーラムを構成した市民団体の他、堀割再生や景観づくり運動団体、北部開発協議会などの方々に呼びかけ、市民団体や行政、研究者などによる「他門川再生研究会」を結成し、研究を開始しました。

多様な水辺の都市再開発がはじまっていた

1994年頃の私の個人的な経験ですが、米国西海岸都市再生視察ツアーでシアトル市のNPOが湖面に面した都市再生の開発を市民事業で行っていたのを目にしていました。（成長管理型の都市再生論としてコンパクトシティ都市政策を論理的、戦略的に実施していたシアトル市、サンフランシスコ市、ロスアンゼルス市、パサデナ市。参考：『都市開発を考える』大野輝之、レイコ・ハベ・エバンス著 岩波新書）欧米では市民が都市事業に直接的に関わることが仕組みとしてできるものがあることは理解していました。ただ、そこでは都市開発に対して一定の拒否権（イニシアティブ法、レファレンダム法なるものがある）が市民側にあって、その緊張の中でより良い土地開発が追及されていくという仕組みが背景にありました。



・人口60万人のシアトル市と市民事業での水辺の都市再開発地区



・NPOシアトルコモンズの事業ガイドを聞く。・プロのスタッフの描いたプラン

2004年、「ソウルのだ真ん中で、どえらいことが始まっているよ！」という情報を山梨大のK教授から頂き、ビデオを入手して見た。他門川に関する歴史的資料の掘り起しなど基礎的な情報集めを行う一方、実際にチョンゲチョン（清溪川 英語でCheong Gye Cheon(Stream)）を見てみよう、2004年9月、水辺の会会員市民30名で韓国視察ツアーに出かけました。第7回全国川の日ワークショップで出会った

（<http://www.mizukan.or.jp/kawanohi/kawanohi.htm>）ソウル市郊外の水原市議員テ・ヨム氏（Mr.Tae-Young Yeom 現在大統領秘書官という要職に就いているらしい）に、市民団体との交流も含めてお願いしました。結果、市の清溪川復元広報センターで事業担当のコンサルR氏の解説を受けるなどし、清溪川復元事業の実際を視察して来ました。事前に当会の田辺敏夫世話人を翻訳のガイドブックで復元の論点は理解していました。さらに04年12月には、国交省の河川事務所長時代からソウル市の清溪川復元事業のアドバイスをしてきた九州大学大学院教授の島谷幸宏氏と篠田昭新潟市長をお迎えして水辺フォーラムを開き、そこで他門川再生の可能性を議論しました。

チョンゲチョン復元事業の背景

- 第1：600年のソウルの歴史と文化的空間の回復が必要とされている。
- 第2：老朽化した覆蓋構造はソウル中心部の安全性を保障できない。
- 第3：ソウルは人が中心となる環境にやさしい都市となる必要がある。
- 第4：均衡の取れた地域開発は忘れ去られた都市中心部を再生させることにより成功する。

もっとも関心の対象となる交通の現状は、毎日合計168,556台にも及ぶ交通量が清溪川路と清溪高架道路を通り、清溪川路では65,810台、清溪高架道路では102,746台が通過している。清溪高架道路の場合、62.5%が通過交通であり、37.5%が都市中心部への交通である。



・左：04年9月、工事の進むチョンゲチョン（清溪川）復元事業
・右：都市再開発とセットのチョンゲチョン復元事業のインフォメーションセンター



廣橋付近の復元前後



東大門付近の復元前後

9.17 他門川再生フォーラム

2005年9月17日、他門川沿いにある明治期に建てられたという登録文化財の木揚げ場教会で開催された他門川再生研究フォーラムは他門川再生研究2005年事業の一環として行いました。ゲストの李龍太(Lee Lyong Tae)氏は、九州大学大学院島谷教授の助手朴埼燦(Kichan Park)先生の紹介で来港が可能になりました。李氏は、清溪川復元推進事業の中心的な人物(本部工事3担当官 書記官で部長クラス)で、かつて東大に留学されており、(財)リバーフロント整備センター編集の「川からの都市再生 世界の先進事例から」にも寄稿されています。

フォーラムでは、李龍太氏から「ソウル市清溪川復元事業の実現へのあゆみ」の講演があり、その中で「清溪川復元」を李ソウル市長が公約に掲げたきっかけ、都心で難しい事業化ができた経緯、市民の支持と一部事業者の反対への対応、完成後の市民や企業、商店、行政、技術者の評価など、復元への市長の決意の大きさや市民の想いが話されました。

その後パネルディスカッションでは、「清溪川復元事業に学ぶものは何か?」、パネリストに篠田昭氏(新潟市長)、山道省三氏(全国水環境交流会)、斉藤力氏(地元市民)、川上伸一氏(NPO 堀割再生まちづくり新潟)、他門川再生研究会主任研究者の上山寛氏、石月升氏、皆川袈裟雄氏、コーディネーター大熊孝氏(他門川再生研究代表者・新潟大学教授・NPO 新潟水辺の会会長)で熱い議論を交わされました。

講演での論点

事業区間 5.84km

02年4月市長選で公約。準備段階で1)推進本部、2)研究支援団、3)市民委員会の3つの柱

市民参加は条例に基づく市民委員会

- (ア) 復元に関する政策審議と評価、調査研究、広報活動の役割
- (イ) 歴史文化・自然環境・建設安全・交通・都市計画・市民意見の6つの分科会
- (ウ) 専門家・市民・NGO活動家の130名
- (エ) 直接市民が体験するツアープログラム2回/日で1年に6600人参加
- (オ) 復元事業広報センター02年完成。ボランティアが運営。
- (カ) 03年12万人 04年6月7600人訪問、外国から22回550名

かつての清溪川の覆蓋事業の目的

- 醜い川を覆うことで見えなくする
- 土地の取得無しに道路に転換する
- スラムの撤去をする

21世紀の清溪川復元事業の効果

- 600年の歴史的価値を再認識できる
- 生態系を重視した都市として再生できる
- 経済的活性化の起爆剤となる
- 都市景観イメージを転換できる
- 都市のヒートアイランド現象を抑制する微気象効果がある
- 風水的再生による強い都市への市民の信頼度が向上する
- 都市開発の新しいパラドックス
- 復元事業は付加価値的発想でなく、「人々の考えや心を変える」復元事業
- 都市に再び水を流し、自然を創出する事業、水は全てを清める力がある
- 復元事業は、社会の貧富、世代断絶などの葛藤を洗い流す和合・ハーモニーの事業

立ち遅れた都市の発展再生になる「再開発プロジェクト」で都市間競争に勝つ。高速道路の地下道路開発圧が大きかった。隔日乗車制による交通抑制(例:ミラノ市)

新潟市で言えば、西堀通りと榎谷小路など都心のメイン道路に約6kmの川(新潟市では堀割でしょうか)を復元するような大事業。それを2003年7月高架道路と川のコンクリート蓋の撤去から始まり、2005年10月には漢江(信濃川のような大河)から導水し、通水完成しました。新潟の他門川2km弱の復元と比較にはなりません。『都市の個性的魅力再生戦略』『都市の新しい環境再生』『官民の新しいビジネスモデル』『堀のあるまち再生』などを研究する上で、大きな刺激になりました。私達も、2006年には完成後のチョンゲチョンを見て、その効果を確認するツアーを企画する予定です。

詳しくは、ソウル市のHP日本語版をご覧ください。

<http://japanese.seoul.go.kr/chungahome/seoul/main.htm>



ソウル市の李龍太氏を招いて開催したフォーラム

参加者全員を笑顔にさせた「清溪川市民歩こう大会」

昨年10月の通水完成式後の様子、30万人の歩こう大会を朝鮮日報のHPでは次のように伝えています。

「妻が笑っています。こんな風に歩いていると、昔、清溪(チョンゲ)川でデートしたことを思い出すのかもしれない…」

ファン・ヨンオク(74/男性)さんとムン・ジョンムン(67/女性)はぎゅっと手をつないだ。太陽の光で妻が日焼けするのではないかと心配し、帽子の位置を直してあげている夫のファンさん。初々しい恋人同士のような。ファンさんは「妻は数年前、脳の手術を受けた後から頭がはっきりなくなりました。だから笑うこともほとんどないのに…清溪川が妻を笑顔にさせてくれました」と話した。

3日、朝鮮日報主催で開催された「清溪川市民歩こう大会」。ソウル・清溪広場を出発し、東大門(トンデムン)区庁前のコサンジャ橋まで5.8キロメートルにおよぶ清溪川復元の全区間を約2時間かけて歩く今回の大会には2万5000人余の市民が参加した。

見物客を狙え！ 清溪川マーケティングが活発

清溪川(チョンゲチョン)開通を迎え、清溪川近隣に社屋を構える企業や新たに新店を出す企業を中心に、清溪川マーケティングが活発に行われている。

SKは、ソウル・瑞麟(ソリン)洞社屋の職員用休憩スペースを市民公園として開放することにした。同社は、菊やポインセチア、草花類など6000個ほどの植木鉢で花壇を飾り、ヤガタムギツク、アブラハヤ、ヤリタナゴなど9種類の魚500匹を6つの大型水族館に入れて、市民に公開する予定だ。SK側は、「歴史的な清溪川開通を迎え、9日まで社屋の周りを市民公園にすることにした」とし、「中長期的には市民が利用できる空間として活用することを思案中」とコメントした。



もっと新潟らしく、もっと人間らしく楽しむ場所として再生

さて私たちは、再度都市の再開発として、都市の自然再生として他門川再生をどう描くか、元の「どぶ」に戻るのではない、もっと新潟らしい空間で、人間らしい居住と商業と交流を楽しむ場所として再生するのだ、と言う想いとそのために実現性を伝える努力、研究を続けなければならない。

新しい新潟人の水辺のライフスタイルは、かつて新潟堀割人が謳歌したライフスタイルを超えられるかそれが命題であるような気がしている。



信濃川河口トキメッセ展望台から左岸他門川跡の全景を見る